



作者
いむむら かんと
岩村 寛人

プロフィール
1985年東京生まれ。

イギリスの大学で建築を専攻し、日本に帰国。設計事務所での勤務を経た後、製図技術の延長として発案した「A_Maze」という画法を元に壁画家としての活動をスタート。スターバックスやナイキなどの企業案件を多数手がけ、現在は美術作家として建築を出発点とする芸術性や社会性を題材とした創作活動に専念する。

2021年コロナ禍の中、災害とアートの関係性に興味をもち、防災をテーマとした町おこしに資するため巨理町地域おこし協力隊に参加。

かつて町の財産であったもの、町の移り変わりによって忘れられてしまったものを改めて美術の資源として活用しコミュニティに還元することを目標に掲げ創作活動中。



website



instagram

アクセス
悠里館2階 東西連絡通路内
宮城県巨理郡巨理町字西郷140
JR常磐線巨理駅直結

その他詳細情報については
↓こちらから



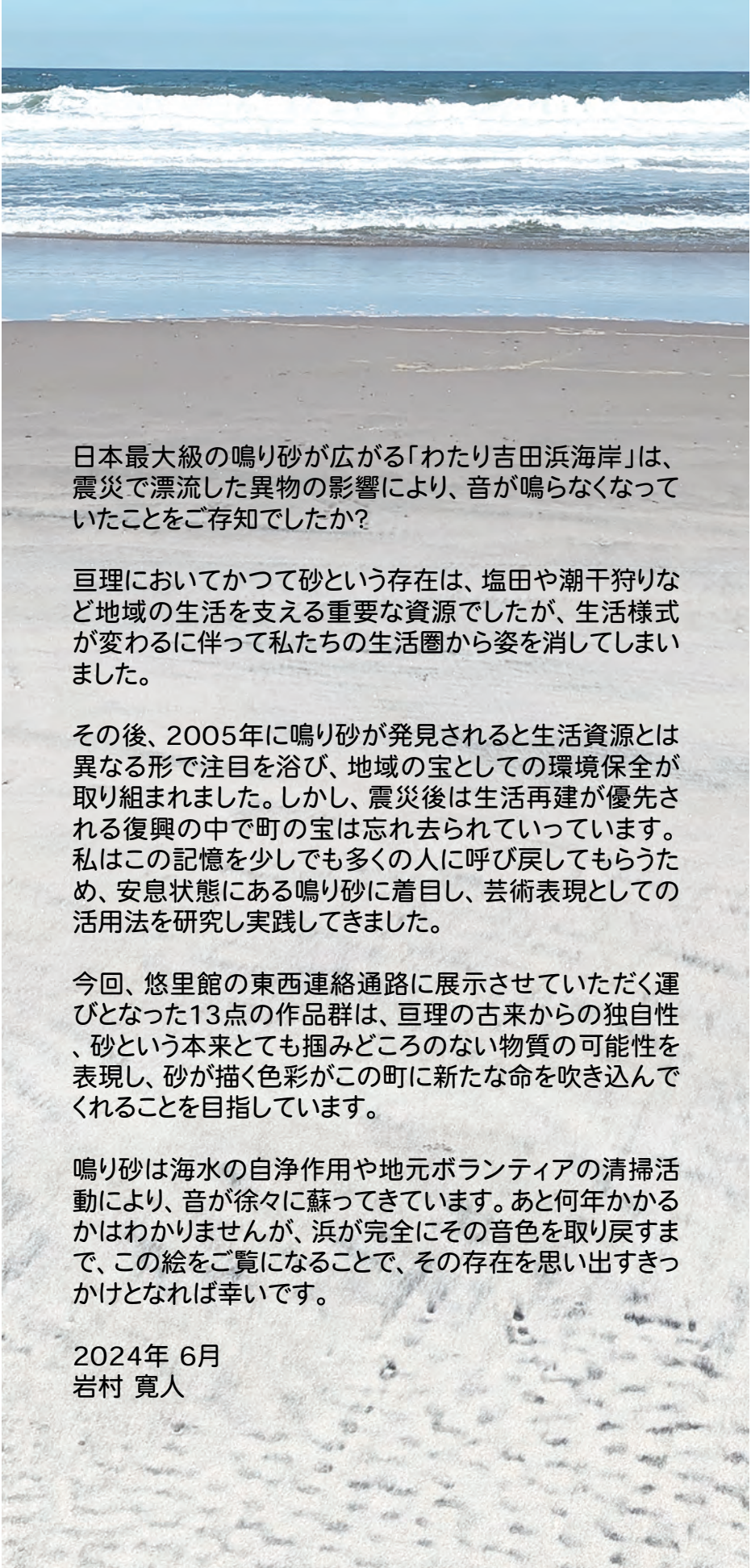
QUIET SAND シリーズ
"安息する砂_01" 2024

巨理町 悠里館連絡通路 常設展示作品

QUIET SAND

安息する砂





日本最大級の鳴り砂が広がる「わたり吉田浜海岸」は、震災で漂流した異物の影響により、音が鳴らなくなっていたことをご存知でしたか？

巨理においてかつて砂という存在は、塩田や潮干狩りなど地域の生活を支える重要な資源でしたが、生活様式が変わるに伴って私たちの生活圏から姿を消してしまいました。

その後、2005年に鳴り砂が発見されると生活資源とは異なる形で注目を浴び、地域の宝としての環境保全が取り組まれました。しかし、震災後は生活再建が優先される復興の中で町の宝は忘れ去られていっています。私はこの記憶を少しでも多くの人に呼び戻してもらうため、安息状態にある鳴り砂に着目し、芸術表現としての活用法を研究し実践してきました。

今回、悠里館の東西連絡通路に展示させていただく運びとなった13点の作品群は、巨理の古来からの独自性、砂という本来とても掴みどころのない物質の可能性を表現し、砂が描く色彩がこの町に新たな命を吹き込んでくれることを目指しています。

鳴り砂は海水の自浄作用や地元ボランティアの清掃活動により、音が徐々に蘇ってきています。あと何年かかるかはわかりませんが、浜が完全にその音色を取り戻すまで、この絵をご覧になることで、その存在を思い出すきっかけとなれば幸いです。

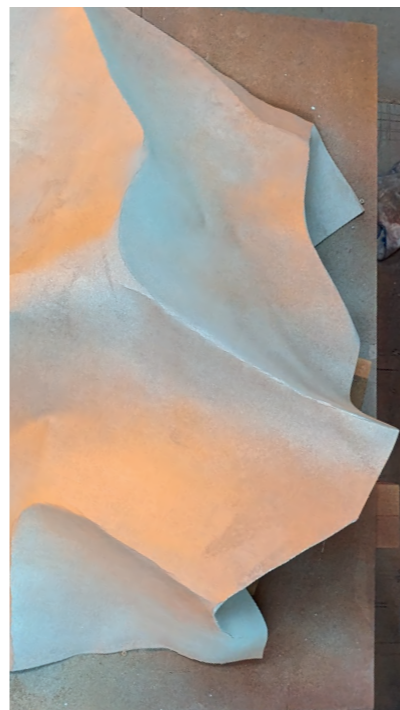
2024年 6月
岩村 寛人

製作過程



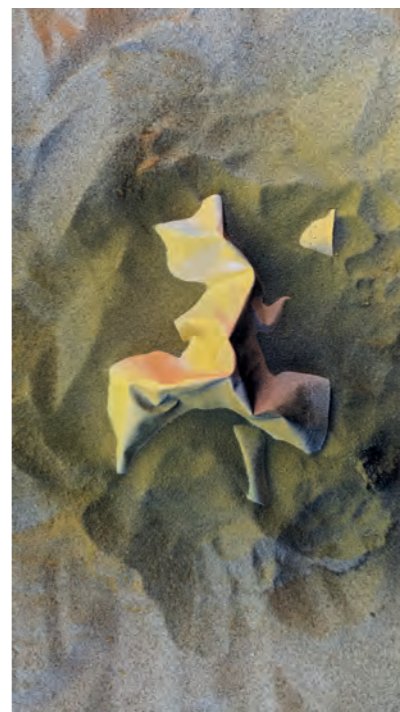
1. 左官

作品の下地となる部分はキャンバス生地に砂とセメントを混ぜたモルタルを薄く塗り固め硬い下地を作ります。これは一般的に左官と呼ばれ建築技術として広く親しまれています。塗り固められた砂は絵の支持体としてこれから塗り重ねられる色の下で眠り続けます。



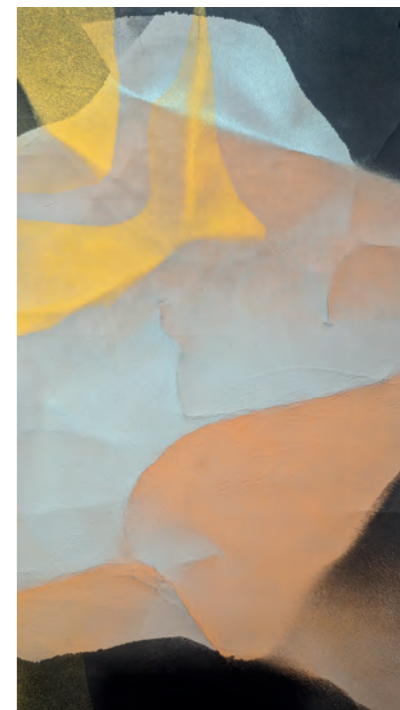
2. モデリング

モルタルが固まり硬くなった下地は力強く折り曲げることで、地形のような形ができあがります。このような造形方法は一般的にはモデリングと称され、モデリングされた下地に色々な角度からスプレーで着彩すると立体感が強調されます。



3. 砂埋め・着彩

モデリングした下地は製作アトリエに準備された砂場の中に埋められ、砂から突出している部分を改めてスプレーで着彩していきます。砂に描かれた曲線が絵に表現の奥行きを与え、徐々に色々な景色を連想できる模様が現れ出します。鳴り砂特有の細かい粒子がこの有機的で綺麗な模様を作り出す秘訣です。



4. 引き揚げ

ステップ3の工程を繰り返していく中で塗り重ねられていく色彩にどこか穏やかな印象を受けた時が作品の仕上がりの合図となります。砂場から絵を引き揚げ、キャンバスを平にひき伸ばします。引き伸ばした状態で板に固定された状態で完成となります。